黄金色の穂波

二百十日も無事に過ぎ、越中おわら風の盆の祭の祈願が天に通じたようで、今年も五穀豊穣が間違いなさそうである。旱（ひ）でりに不作なしの諺通り、秋の田には稲穂が垂れ、収穫の季節を迎えようとしている。

この黄金色の稲田に秋の風が吹き抜け一面の稲穂が波打ち、微妙な色模様となってサラサラと音が聞こえるように広がっていく。一陣の爽風によって稲の穂が波打ち、黄金の波となっていくあり様は「穂波（ほなみ）」と呼ばれる。日本人の心の奥深いところの心情に触れる情景である。

このように稲穂がゆれ波打つのは小さな風の渦、風の息によるもので見えない風の足跡のようなものである。一見なにげない現象なのだが、じつは稲作にとって自然からの大きな恵みとなっている穂波なのである。

稲のように、高温で高い湿度のもとで密に植えられている作物では、空気のよどみが成育を妨げてしまう。風の息によって引き起こされた穂波で稲は揺れ、風の渦は効率よく新鮮な空気を密性した葉の奥深くに送り込む。揺れる葉を通して陽の光をも深く誘い入れる。

「麦畑を吹く風で見える麦青の波」も「水澄む」という季語でいう静かな湖面にさざ波の縞模様を引き起このもみな穂波と同じ仲間なのである。穂波という響きのよい言葉なのに俳句の季語にはなく、以外にも、ローマ字書きの英語として国際的にも通用する数少ない言葉のひとつとなっている。

日本の稲作はガラスづくりのような芸術品だとして評価が高いが「ほなみ」という風の息の足跡という、さりげない自然からの贈り物が一役を果たしているのである。

（気象庁。村松　照男）